

機関紙「福岡更生保護」別冊

第75回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

入賞作文集



法務省

“社会を明るくする運動”福岡県推進委員会



本誌は一部共同募金の配分を受けてできたものです。

はしがき

法務省が主唱する“社会を明るくする運動”は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全・安心な地域社会を築こうとする全国的な運動です。昭和26年に始まり、本年度で75回目を迎えました。

“社会を明るくする運動”作文コンテストは、本運動の一環として、次代を担う小・中学生の皆さんに、日常の家庭生活、学校生活等の中で体験したことを基に、犯罪や非行に関して考えたことや感じたことを生き生きと作文に書いてもらうことを通して、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的としています。平成5年から始まり、今回で33回目となります。

本年度は、福岡県内において46,428点（小学生21,784点・中学生24,644点）となる多数の応募がありました。

応募作品については、県内各保護司会の選考を経て、福岡県推進委員会において審査した結果、小学生の部11点、中学生の部10点について福岡県推進委員会委員長賞を始めとする入賞作品を決定しました。また、本年度はその中から中学生の部において日本更生保護協会理事長賞を受賞しております。

本作文集は、これらの福岡県入賞作品を収録したもので、一人でも多くの人に作品を読んでいただき、児童・生徒の皆さんの思いを犯罪や非行のない地域社会づくりに役立ててもらうとともに、これから応募される児童・生徒の皆さんの参考になればとの思いで作成しております。

結びに、本コンテストの実施に当たり、御後援をいただいた福岡市教育委員会、北九州市教育委員会、西日本新聞社を始め、多大な御尽力をいただいた更生保護関係者、学校関係者及び最終審査選考委員の皆様、そして、応募していただいた小・中学生やその御家族に対し、深く感謝申し上げます。

法務省

“社会を明るくする運動” 福岡県推進委員会

目 次

福岡県推進委員会入賞作品

【最優秀賞】

福岡県推進委員会委員長(福岡県知事)賞(小学生の部)

社会を明るくする運動	福岡市立小笹小学校 6年	ひろ 瀬	せ 瀬	なり 成	まさ 将	4
------------	--------------	---------	--------	---------	---------	---

福岡県推進委員会委員長(福岡県知事)賞(中学生の部)

名のない苦しみ	みやま市立東山中学校 3年	くま 熊	かわ 川	な 奈	こみ 瑚美	6
---------	---------------	---------	---------	--------	----------	---

【優秀賞】(小学生の部)

西日本新聞社賞

鼻くそと模擬裁判	福岡市立高宮小学校 6年	みつ 光	なが 永	てん 天	ま 駿	8
----------	--------------	---------	---------	---------	--------	---

初めての傍聴を通して	福岡市立室見小学校 6年	はら 原		な 梨	なえ 苗	10
------------	--------------	---------	--	--------	---------	----

福岡県保護司会連合会会長賞

明るい社会にするために	大野城市立大城小学校 6年	かわ 川	さき 崎		あおい 葵	12
-------------	---------------	---------	---------	--	----------	----

相手のために行動できる社会	岡垣町立山田小学校 6年	なが 長		あ と	かり 明香里	14
---------------	--------------	---------	--	--------	-----------	----

福岡県更生保護協会理事長賞

安心安全の社会を作るために	北九州市立折尾東小学校 6年	ひさ 久	もと 本		あい 藍	16
---------------	----------------	---------	---------	--	---------	----

祖母から学んだこと	福岡市立飯倉小学校 6年	もも 桃	さき 崎	そう 奏	すけ 佑	18
-----------	--------------	---------	---------	---------	---------	----

福岡県更生保護女性連盟会長賞

「心に実る思いを大切に」	北九州市立柄杓田小学校 6年	おお 大	の 野	蒼	ら 良	20
--------------	----------------	---------	--------	---	--------	----

小さなことから	北九州市立あやめが丘小学校 6年	よし 吉	かい 開	とう 挑	ま 真	22
---------	------------------	---------	---------	---------	--------	----

福岡保護観察所長賞

違いを知ることは学びの機会	福岡市立草ヶ江小学校 6年	に 仁	き 木	そう 颯	や 哉	24
---------------	---------------	--------	--------	---------	--------	----

小さな思いやりで明るい社会へ	宗像市立自由ヶ丘南小学校 6年	み 三	うら 浦	こう 孝	すけ 祐	26
----------------	-----------------	--------	---------	---------	---------	----

【優秀賞】(中学生の部)

日本更生保護協会理事長賞・西日本新聞社賞

保護司とつくる、希望のある時間 …豊前市立八屋中学校 3年 なか井 いとも とも智 き喜 28

西日本新聞社賞

社会を明るくする行動 …筑前町立三輪中学校 3年 まつ松 お尾 ゆう優 ご吾 30

福岡県保護司会連合会会長賞

社会を明るくするためにできること …福岡市立片江中学校 1年 たつ田 こ子 ゆ由 な名 32

素直な気持ち …福岡市立城南中学校 1年 まえ前 だ田 の乃 え咲 34

福岡県更生保護協会理事長賞

たった一台の自転車から見えたこと …古賀市立古賀北中学校 3年 しも下 ぎし岸 ゆめ希 36

福岡県更生保護女性連盟会長賞

誰だって、みんなで変わる …福岡大学附属大濠中学校 1年 そう曾 うえい唯 えん恩 38

「社会を明るくする運動」 …福智町立金田義務教育学校 8年 たか高 くら倉 さち幸 か夏 40

福岡保護観察所長賞

僕のセーフティーエリア …朝倉市立南陵中学校 3年 いま今 むら村 い伊 ぶき吹 42

自分たちで決めて守る …久留米市立城島中学校 2年 よし吉 むら村 はる春 ま真 44

【佳作】

小学生の部一覧 ……46

中学生の部一覧 ……49

【最優秀賞】

小学生の部
福岡県推進委員会委員長(福岡県知事)賞



社会を明るくする運動

福岡市立小笹小学校 6年

廣瀬成将

ぼくの母は弁護士です。ぼくにとって母の仕事は、いつも忙しくて難しいことをしている仕事という印象でした。でも、ある日の母の話をきっかけに、人を助けるという仕事の本当の意味が少しだけわかった気がしました。

その日の夜、母は仕事から帰ってきて、夕食のあとにぼつりと話し始めました。

「今日ね、ある中学生の子のことを考えて、なんだか心が重かったの。」

母の話によると、その少年は中学二年生。もともとはごく普通の生徒だったそうです。でも、だんだんと夜に友達と遊ぶようになり、帰る時間が遅くなっていきました。学校にも行かなくなり、家でも家族と話さなくなっていったそうです。そんな日々の中で、少年はある夜、友達と一緒にバイクを盗んでしまい、警察に捕まりました。

少年はその後、少年鑑別所に入りました。そこでは、家庭裁判所の判断が出るまでの間、生活指導を受けたり、自分を見つめ直す時間を過ごします。母はその「付添人弁護士」として関わることになりました。

付添人は、少年の立場に立って、本人の話をよく聞き、これからどうすれば立ち直れるかを一緒に考える役割です。母は何度も少年に会い、話を聞きました。少年は最初、自分のことをなかなか話そうとしなかったのですが、少しずつ打ち解けていくうちに、心の中にあったさびしさや不安、本当はどうしてよいかわからなかった気持ちを、少しずつ話してくれるようになったそうです。

その後、少年の未来をどうするか、多くの大人たちが真剣に向き合いました。警察や検察、調査官、裁判官など、それぞれの立場から、

少年にとって本当に必要なことは何かを考え、話し合いが続けられました。

母は何度も少年に向き合って感じたこと、彼の中にあった不安や葛藤、そして少しずつ芽生えてきた「やり直したい」という気持ちを、丁寧に裁判官たちに伝えました。

やがて家庭裁判所で審判が行われました。鑑別所での日々の中で、少年は少しずつ自分の過ちと向き合い始めていました。その思いが、審判の場での一言に込められていたのだと思います。少年はうつむきながらも、

「もう二度としません、ごめんなさい。」

と絞り出すように話したその声に、母は少年の心の変化を確かに感じたそうです。

裁判官は、少年のこれまでの生活や気持ちの変化、家族や地域のサポートがあるかどうかなど、さまざまなことをこすりよし、少年は少年院には行かず、家に戻るという審判が下されました。今後は保護観察というしくみのもとで、地域の中でまじめに生活をやり直していくことになりました。少年は自分の現状をしっかりと受け止め、これからは誰にも迷惑をかけずに生きていきたいと、小さい声で話していたそうです。母はこう言いました。

「たしかに、あの子は悪いことをした。でも、ちゃんと反省していて、これからどう生きるかを自分で考えることであの子の未来はきっと変えられると思うの。」

ぼくは、ただ「悪いことをしたから罰を受ける。」というだけではなく、「どうすれば立ち直れるか。」と一緒に考える母に、感動しました。あの少年のようにつまずいた人を責めるのではなく、支えようとする人がそばにすることで、人はやり直せるのだと実感しました。

「社会を明るくする」という言葉は大きく感じるけれど、一人ひとりが「やり直せるように支えること」を積み重ねることが、その第一歩になると思います。

ぼくは、そんなふうになんか人を支える母の姿をほこりに思います。そしていつか、ぼく自身も誰かの力になれる人になりたいです。母のように、静かに人を支えることで社会は少しずつ明るくなっていくことを、今では強く思っています。





名のない苦しみ

みやま市立東山中学校 3年

熊川 奈瑚美

「人は変われるのか。」

罪を犯した人はやり直すことはできるのでしょうか。変わろう、やり直そうとする人はきっといるはずです。私も変われると信じたいと思う一方で、「再犯」という言葉を耳にするたびに、その問いから目をそらしたくなる気持ちが湧いてきます。どうして、再び罪を犯してしまうのでしょうか。その繰り返しはいったいどこから生まれているのでしょうか。

私は、再犯が起きてしまうのはただ本人だけが悪いの一言で終わる問題ではない気がしてなりません。もちろん、罪を犯した人に責任が伴うのは当然のことです。しかし、何度も繰り返される現実の裏には、本人だけでは背負いきることのできない複雑な実状があるのではないのでしょうか。

実際、法務省の統計によれば、刑務所を出た人のうち、約4割が5年以内に再び罪を犯しているといえます。この数字は、「立ち直ること」がいかに難しく、孤独な道なのかを私たちに突きつけているようです。

それでは、「立ち直る」とは、何を意味するのでしょうか。もう二度と罪を犯さないこと。社会の中で働き、生活を築くこと。そして、たとえ誰に認められなくても、自分の過去と向き合い続けていくこと。そのどれもが立ち直りの一部であり、どれもが簡単には語れない苦しさを抱えています。

以前、万引きを繰り返していた男性の話を耳にしたことがあります。出所後も家族や職場に受け入れられず、また罪を犯す状況に陥ってしまうその悪循環。しかし、ある人との出会いから再犯をやめることができたといえます。そのある人とは、罪を犯した人の立ち直りを支える地域のボランティアである保護司でした。保護司はさまざまな面をサポートしてくださったのですが、やっぱり一番その男性の再犯

を止めることができたのは男性が立ち直ろうとすることを否定せず、信じて、見守る存在だからなのだとは私に思いました。

「立ち直る」それを求めるのは社会側、でも立ち直ろうとする人を世間はなかなか受け入れることはできません。「もう一度やり直したい」と思っても、仕事がない、家がない、そして「前科がある」という目で見られ続ける。まるで「やり直す」ことは許されていないかのよう。罪を犯した責任は本人にある、けれど、「立ち直れ」と言うだけで終わってしまえば、今のような社会のまま。立ち直るのに必要なのは、保護司のように自分を信じてくれる存在、そしてもう一度、社会の一員として踏み出せる場なのだと思います。

罪を償った人とどう関わり、どうやってその場をつくっていくか、それは私たち一人ひとりに問われていることだと思います。私が思う再犯のない明るい地域社会をつくるためには、立ち直ろうとする人を否定せず、見つめ続けるそんな態度がきっと必要です。誰もが最初から加害者だったわけではない、誰だって、いつ、どこで心が折れてしまうか分からない。そう考えると、「立ち直り」を支えることは、特別な人のための活動ではなく、自分自身を守ることにもつながっているのかもしれない。

「人は変わるのか。」

私はまだその問いにははっきりと答えることができません。過去の行いは消えないし、被害者の傷も残り続ける。それでも、被害者をもう出さないよう生き直そうとする人がいるのなら、私はその意志まで否定したくはありません。「名のない苦しみ」が誰にも気づかれないまま置き去りにされていく。そのことに私たちが少しでも気づける社会でありたい。立ち直ろうとする人が、ひとりぼっちにならない社会。その一歩が明るい地域社会をつくる大きな力になると私は信じています。



【優秀賞】

小学生の部
西日本新聞社賞



鼻くそと模擬裁判

福岡市立高宮小学校 6年

光 永 天 駿

「ほくじゃない！」

ほくは思わずそう叫んだ。四年生のある日、そうじが終わって教室に帰ると、ほくの席の近くのA君の机に鼻くそがくっついていて、ほくがA君の机に鼻くそをくっつけた犯人じゃないかとA君に疑われたのである。結局、解決しないまま授業が始まり、鼻くそ事件は闇にほうむられた。ほくの容疑は最後まで晴れなかった。その日はモヤモヤした気持ちでスッキリしなかった。自分を疑ったA君を腹立たしく思った。

時は流れ、六年生になったほくは夏休みに裁判所子ども見学会に行き、模擬裁判員裁判に参加した。模擬裁判員裁判の事件の内容はこんなものだ。

- ・加害者は赤鬼。
- ・被害者は桃太郎。
- ・赤鬼が桃太郎の収穫した野菜を強奪した。
- ・桃太郎が赤鬼のシルエットを目撃した。
- ・赤鬼は食べる物に困っていた。
- ・赤鬼は近所の青鬼に野菜を渡していた。赤鬼に野菜をどこで手に入れたか聞くと、黙秘した。
- ・桃太郎の家には赤鬼の金棒が落ちていた。赤鬼は前に桃太郎の家に行ったときに忘れたと言った。

ほくは検察官役だった。ほくは赤鬼が絶対にクロだと思った。なぜなら赤鬼がやったという証拠は二つあるからだ。一つ目は食べ物に困っていた赤鬼が桃太郎を襲う動機があること。また、近所の青鬼に渡した野菜の入手場所で黙秘したのは怪しすぎる。桃太郎から奪って手に

入れた野菜を近所の青鬼に渡していたとしか考えられない。二つ目に桃太郎の家に置いてあった金棒はただの忘れ物とは思えない。忘れ物なら取りに行っていたはずだ。赤鬼がとっさについた言い訳のようにしか聞こえない。ぼくは検察官としてこの二つの証拠を裁判官たちに強く主張した。

判決の時、ぼくは赤鬼が有罪になるはずだと思い、笑みを隠せなかった。しかし、ぼくの予想を裏切り赤鬼は裁判官から「無罪」を言い渡された。赤鬼はやったあーと喜んだ。ぼくはその赤鬼の笑顔がぼくをあざ笑っているかのように見えた。赤鬼に対して憎々しい気持ちになった。机をドンと叩いて思わず「おかしい！」と叫びたかった。そのときのぼくは怒りでいっぱいになり、必ず控訴して新しい証拠や証言を集めてやる。有罪になる証拠は使って、無罪になる証拠は見なかったことにして次こそは憎き赤鬼を有罪にして、ろうやにぶちこみたいという気持ちにかられた。胸の中がどろどろしたもので腐っていくような感覚に陥った。

その後も無性にイライラして一緒に参加した母に八つ当たりして嫌な態度や言動を繰り返した。恐ろしいことに母にも怒りが伝染し「そんな態度ならもう帰るよ。」

と冷たい顔でぴしゃりと言われた。そのとき、冒頭の鼻くそ事件が頭に浮かんだ。今のぼくはあのときのA君で、赤鬼はあのときのぼくではないか。決めつけられるほど悲しいものはなかったはずなのに、ぼくは感情だけで突っ走ってしまった。

どろどろした感情だけで有罪だと思いこみ犯人に仕立て上げてしまう。これが冤罪を生んでしまう原因ではないか。冷静になったぼくは、母に謝罪し、裁判官の法服を着て笑顔で記念写真を撮り裁判所を出た。

今回の経験を通して小学生のぼくができる社会を明るくする運動とは何だろうと考えてみた。「社会を明るくする運動」とは罪を犯した人が立ち直れるように支えるだけではない。無実の人が疑われないようにする社会をつくることでもあると気付いた。ぼくは、これからは友達が「あいつがやったんだ。」と言っても、うのみにするのではなく、「本当に？」と一度立ち止まって考えるように気を付けたい。そうやってすぐにあいつがやったんだと思わないことが冤罪を防ぐためのぼくに出来る身近な行動だと思う。



【優秀賞】

小学生の部
西日本新聞社賞



初めての傍聴を通して

福岡市立室見小学校 6年

原 梨 苗

この夏、私は初めて裁判所に行き刑事裁判を傍聴しました。裁判所の中はとても静かで人のいない病院のような雰囲気、母が「少しこわいね。」と言いました。ニュースでは見たことがありましたが、本物の裁判を目の前で見るのは初めてでとてもきんちょうしました。

その日は、覚せい剤を使ってしまった男性の裁判でした。その人は五回もつかまったことがあるそうで、何度も服役したことがあるそうです。私はどうして何度も同じことをしてしまうのだろうと思いました。

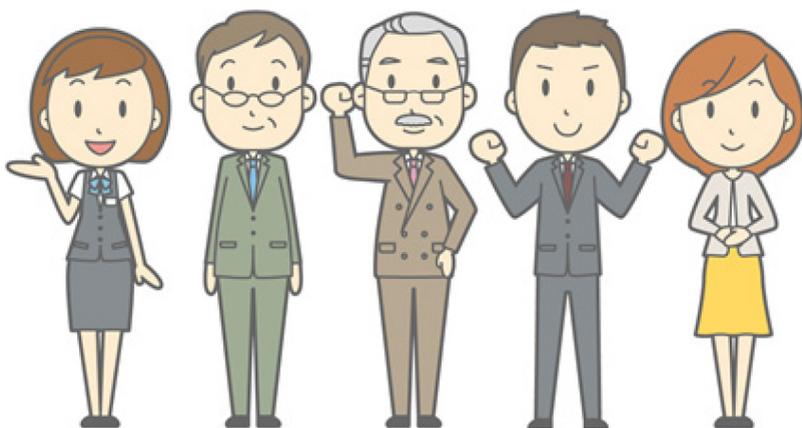
裁判の中で、その人がまた薬に手を出してしまった理由も話されました。弟さんが自ら命を絶ってしまったことや、お母さんが亡くなってしまったこと。さびしさと自責の念にかられ、もう二度と近づかないと決めていた薬に手を出してしまったと聞きました。私はそんな被告の気持ちも少しわかるかなあとと思いました。

その裁判の中で、私の心に一番強く残ったのは、情状証人として来ていた運送会社の社長さんのお話でした。情状証人とは、被告の人から裁判官に伝える役割の方です。社長さんは「彼はまたうちの会社で働かせます」とはっきり言いました。その会社では、前にも覚せい剤でつかまったことのある人たちが働いていて、今はまじめに頑張っているそうです。私はその話を聞いて、とてもおどろきました。「失敗しても、やり直すチャンスを得られれば立ち直れるんだ」と思いました。社会が、「一度過ちを犯した人はダメだ」と思ってしまったら、更生したいと願っている人は行き場をなくしてしまうと思います。でも、この社長さんのように信じて受け入れてくれる人がいるからこそ、やり直せる人がいるのだと思いました。私はその優しさと包容力にとて

も感動しました。信じて見守ることも、社会を明るくする大切な力なのではないでしょうか。

私はこの体験を通して二つのことを学びました。ひとつは「薬物には絶対近づかない」ということです。そしてもうひとつは、友達や身近な人がつらい気持ちでいたら助けてあげられる人になりたいです。困っている人にやさしくできることも、社会を明るくするために必要だと思ったからです。

裁判所での傍聴体験は、私にとって一生わすれられない学びとなりました。大人になったときは、この社長さんのように「信じて支えてあげられる包容力のある人」になりたいです。そしてみんなが安心して暮らせる明るい社会をつくる力になりたいです。



【優秀賞】

小学生の部
福岡県保護司会連合会会長賞



明るい社会にするために

大野城市立大城小学校 6年

川 崎 葵

私は、「犯罪や非行は、なぜ起こるのか」について、大きく二つのことを考えました。

一つ目の原因は、犯罪や非行をした人は、相談する人や場所がなかったり、自分から相談するという行動が難しかったのではないかと、思います。そこで、私の住む福岡には、どのような取り組みが行われているのか調べてみました。まず、福岡県のホームページを見ました。すると、被害者の相談は、たくさんありましたが、加害者相談のページはすぐには見つかりませんでした。そして見つけたのが福岡県警察のホームページです。そこには、「少年サポートセンター」というページがありました。私は、勝手なイメージで、犯罪や非行を犯した人を逮捕するのが警察と考えていました。ですが、犯罪や非行をしまいそうな人を救うのも、警察なんだということを知りました。調べてみて感じたのは、相談する場所がとても少ないということです。被害者支援もとても大切だけど、その一歩前に加害者になるかもしれない人が相談できる場所をもっとたくさん、そして身近に作るべきだと思います。そこで私が考えた案は、すべての家に、返信用封筒を入れて内緒で相談できるようにする。また、フリーダイヤルやSNSを通じた相談についてのCMを流すということです。人の目が気になって相談できない人や、相談というのは、直接会って話すことだけだと思っている人も多いと思うからです。

二つ目の原因は、「知らない」ということです。知らないうちに犯罪

や非行に手を染める人も多いと聞きます。その解決には「知る事」が一番だと思います。そのために私は、実際に犯罪をおかした人で立ち直った人自身が、学校などで当時のことや、立ち直った今になって分かること、どんな行動から犯罪になってしまったのかなどを、本当に経験した人が話すことで、当時の本人の気持ちなども分かりやすく、説得力もあると思います。

以前、少年院で働いている方に、私の学校で麻薬を使ってはいけない理由や、麻薬を使ってしまった子供の様子などについて詳しく聞かせてもらいました。本当は見えないものが見えるように感じたり何かが迫ってくるように感じてしまい、その苦しみや恐怖で自分を傷つけてしまったそうです。その話の中に、「友達に誘われた」という理由で麻薬を使ってしまったという話がありました。私は、いつも遊んだり話したりしている友達が原因で犯罪を犯してしまうことがあると知り、びっくりしました。相手がだれであってもしてはいけないことは断ることが大切だと学びました。そのことを学べたのも、経験者のおかげです。経験者がいるからこそ、未経験者のままでいられるのです。

このように、相談をする方法の選択肢を増やし、相談しやすい社会にし、犯罪や非行をして、立ち直った人の経験などをもとに、犯罪や非行の道に走ってしまう人を救い、そして減らせるようにすることが今、私たちにできる社会を明るくするための方法だと私は考えます。



【優秀賞】

小学生の部
福岡県保護司会連合会会長賞



相手のために行動できる社会

岡垣町立山田小学校 6年

長 渡 明香里

保護司の人が学校に来て、どんな活動をしているのか教えてもらう機会がありました。このことを母に話すと、祖父も保護司をしていることを知りました。祖父が、何かボランティアをしていることは知っていたけど、保護司をしているということは知らなかったので驚きました。

祖父に保護司の仕事について詳しく聞いてみました。

祖父は、一人につき二週間に一度、面談を行っています。面談のときは、保護観察を受けている人の話を聞いたり、生活の相談にのったりしているそうです。今は、二人受け持っているので一週間に一度しているそうです。

女優の戸田恵子さんがアンパンマンの作者のやなせたかしさんとの思い出を話しているインタビュー記事をインターネットで目にしました。

その内容は、

「もし自分がアンパンマンだったら顔をちぎって与えるかわりに何ができるだろうか。」というもので、結論としては、

「相手のために尽くす時間をつくる。」

ということではないかと話されていました。

祖父も相手のために尽くす時間を作ることでその人が安心出来たり、更生の道を歩んだりすることができるように見守っているのかなと思いました。

犯罪や非行をしてしまっている人は、孤独や生きづらさを感じていたり、生活に困ったりしている人が多いそうです。そしてその状況は誰にでも起きる可能性があります。そのため、犯罪や非行は、自分に

関係のない遠い世界の話ではないのです。

犯罪や非行を防ぐために大切なことは、一人で辛い思いをしている人に寄り添って人と人との関わりをもったり、これまでに犯罪や非行をしてしまった人に対して差別をしないようにしたりすることだと私は考えます。なぜなら、誰もが安心して孤独のない生活を送ることができる社会になることで、犯罪や非行を無くせるからです。

そして、私は、そのような社会をつくるには、自分から行動しなければ何も変化が起きないと思いました。なので、一人で悩んだり、辛い思いをしていたりする人がいたら、自分から話を聞くようにしたいです。大人の見えていないところで子供同士の問題が起きているときは、自分から、大人に伝えにいくようにしたいです。

自分から、相手のために行動できる社会になったらいいなと思います。



【優秀賞】

小学生の部
福岡県更生保護協会理事長賞



安心安全の社会を作るために

北九州市立折尾東小学校 6年

久 本 藍

私の一日のルーティンの中には、夜にお母さんと一緒にニュース番組を見る時間があります。ニュースの中には明るいニュースもあれば、暗いニュースもあるし、日本全国のあちこちで、世界各国で毎日いろんなことが起きていることを知ることができます。暗いニュースの時にはこんなことが本当に起こっているのか？と不思議に思うこともあります。

この作文を書くにあたって何か題材になることはないかなと考えてみましたが、自分の身近なところでは罪を犯すこと、非行をする人のことを深く知ることはできません。

ただ私は警察署の裏に住んでいるので、時々警察署の裏口から手錠をされて、こしをロープでつながれて車に乗せられていく人を見かけることがあります。それが、おじいさんだったり若い人だったりいろんな人がいます。ときには、大声を出して暴れている人もいます。どんなことをしたらこんなことになるのだろうと見かける度に思います。悪いことをする人がいるということは、必ず被害にあっている人がいるので、今まで罪を犯した人のその後はよく考えたことはありません。

しかし、この作文コンテストの内容を読んでいたら「保護司」という活動があることを知りました。犯罪や非行をした人たちが再び罪を犯すことがないように、刑事施設や少年院から社会復帰を果たしたときに、スムーズに社会生活を送ることができるように立ち直りを地域で支えているボランティア団体だそうです。なぜボランティアで犯罪を犯した人を助けようと思うのか、私だったら少しこわいなと思いました。

そこで、私はお母さんに「給料ももらえないのにどうして保護司に

なってボランティアをしようと思うのかな」と聞いてみました。そして、お母さんから「おばあちゃんはずっと前から保護司会で活動をしているから何か話を聞いてみたら？」と言われました。実際に刑務所や少年院に出向いたときの話をしてくれたり、受刑者が刑務作業で製作した製品の販売を手伝ったりしたときの話を聞きました。こわいという思いの方が多い気持ちで行くけれど、きちんとした人、とても悪いことをした人には見えない人もたくさんいるとおばあちゃんは言っていました。だけど、犯罪者（加害者）がいるということは絶対に被害者がいるわけで、被害にあった人のことをもっと守っていく社会、考えていかなければならない社会を作っていくと、これから生きていく私たちの安心安全な明るい未来に不安が残ると言っていました。生きていくなかで人とのかかわり方を間違ってしまった、小さなころから人とのかかわり方をうまく得ることができない環境で育ってしまうことでかたんに道が外れていくのだと教えてもらいました。

今、私はまだ小学生で折尾東小学校という小さな集団の中で学び、生活しています。大好きな先生がいて、大好きな友達もいて、毎日いろんなことを教えてもらったり、やさしくしてもらったり、笑いあったりして心を通わせています。この小さな小さな心の通わせあいが必要なことだということに気づくことができました。家族と、学校のみならず、地域の人と、今の自分にできることは少ないけれど、人とのつながりを大切に、少しずつ社会の一員に加わっていけるように暮らしていきたいと思います。



【優秀賞】

小学生の部
福岡県更生保護協会理事長賞



祖母から学んだこと

福岡市立飯倉小学校 6年

桃 崎 奏 佑

ゾワゾワ。あるアニメを見ていて、自殺をしようとする高校生が出てきた。僕は胸が苦しくなり、どうしてこんなことになるのだろうと思った。調べてみると、2024年の自殺者は、529人で、未成年（小、中、高生）史上最多だった。僕は、アニメの登場人物のように、悲しい、つらいなどの思いをして自殺をする人を一人でも減らせないだろうかと思った。自殺をとどめるには、自分を必要としてくれたり、受け入れてくれたりする環境がとても大事だと思う。なぜかというと、無視されたり、否定されたりということが続くと、その人は心を閉ざしてしまい、生きていけなくなってしまうからだ。この話を母にすると、

「同じような思いをしている人が、犯罪や非行をしてしまった人の中にもいると思うから、祖母に話を聞いてみたら。」

と、助言をくれた。

僕には、最近まで保護司をしていた祖母がいる。保護司は、犯罪や非行をしてしまった人を、保護観察官と協力して生活指導や就労支援などのサポートをする仕事だ。夏休みに祖母にあったときに、僕は、保護司をしているときに大事にしていたことについて聞いてみた。僕が驚いたことは二つある。一つ目は、相手に思いを打ち明けてもらうために大切なことは何ですかという質問に対して、祖母が「相手に思いを打ち明けてほしいとは思っていない。」と答えたことだ。僕は、保護司の立場からすると、相手に対して思いを打ち明けてもらわなければいけないと思っていた。しかし、祖母の好きなことを一緒にしたりしていたという。そのうちに良好な関係ができたら、祖母が聞かなくて、相手が悩みを打ち明けてくれるということだった。僕にはそ

んな発想がなかったし、相手とのつながりを大切にする祖母だからこそ思いつくことだと思った。

もう一つは、祖母がサポートをしている相手が立ち直ってきたときにどんな言葉をかけていたかという質問に対して、祖母が、『それがあなたにとって正しいことだよ』や『それでいいと思うよ』と声をかけて、寄り添っていただけ。」

と、教えてくれたことだ。この言葉を聞いて、僕は不思議に思った。なぜなら、この質問に対してそんなに簡単な言葉でまとめているのかと思ったからだ。だけど、祖母は、

「一人一人がちゃんと考える力を持っていて、応援をしてあげたり寄り添ってあげたりすることが大事。人は、何も強制しなくても、自分で自分の走るレールを作る力がある。」

と、言っていた。祖母はその力を発揮してもらおうと思っていたようだ。祖母によると、犯罪や非行をするときは、その人自身が寂しくなっている時が多いそうだ。もし、自分が非行や犯罪をして、周りから拒絶されたときに、祖母のように寄り添ってくれたら、僕はとてもありがたいと思うし、心があたたかくなるなと思った。

祖母は話をしているとき、厳しい顔や怖い顔をする事なく、ずっと優しくおらかな表情をしていた。その人の良いところも悪いところも受け入れていたからだと思う。もし僕だったら、これはこうしなきゃいけないよと険しい顔になったり、イライラした気持ちになったりすると思う。改めて、祖母は心が広いと思った。特別難しいことは言って無くてびっくりしたけれど、これからの僕の生活にも活かして行けそうだと思う。

自分の周りに苦しい状況の人がいたら、応援をしたり、寄り添ってあげたり、その人が笑顔になってくれたりするといいなと思う。過去は変えられないけれど、未来は変えられる。それならば、変えられる未来にこだわったほうが僕はいいと思う。これから僕も自殺をしようとする人や犯罪、非行をしてしまった人に出会うかもしれない。その時に大事なことは、特別な何かをすることではなくて、笑顔で受け入れて寄り添うことだと思う。誰かの助けになれるよう、笑顔をたやさず、みんなに優しくありたい。



【優秀賞】

小学生の部
福岡県更生保護女性連盟会長賞



「心に実る思いを大切に」

北九州市立柄杓田小学校 6年

大野 蒼 良

「社会を明るくする運動」について初めて聞いたとき、ぼくは「犯罪をなくす世界なんて本当にできるのだろうか」と思いました。どんなに立派な人が「なくそう」と呼びかけても、悪いことをしてしまう人がいる限り、世界から完全に犯罪が消えることはむずかしいと感じたからです。きっと、その人にはその人なりの事情や苦しみがあるのだと思います。その気持ちを本当に理解することは簡単ではありません。でも、もしその人が「立ち直りたい」と思ったとき、周りに支えてくれる人がいれば、きっとやり直せるはずです。

ぼくは去年、柄杓田ひしゃくだに転校してきました。転校するとき、新しい友達や先生とうまくやっていけるか不安でいっぱいだったけど、学校のみんなや地域の方があたたかく迎えてくれたおかげで、その不安はすぐなくなりました。

特に田んぼでの米づくりの体験は、忘れられない思い出です。田んぼに足をとられて動けず、苗もうまく植えられなかったぼくに、地域の方が「大丈夫、こうやってごらん」と声をかけてくれました。アドバイスを受けて何度も挑戦するうちに、少しずつ苗をまっすぐ植えられるようになりました。そのとき、「失敗しても支えてもらえればやり直せる」と強く感じました。

学校生活でも、ぼくはときどき失敗してしまうことがあります。人の気持ちを考えずに発言してしまったり、つい手が出てしまったりするのです。そのたびに先生に注意を受けます。「またやってしまった」と後悔し、毎日を注意されずに過ごしたいと思うのに、なかなかうまくいきません。そんな自分がっかりすることもあります。

それでも、ぼくが今こうしてがんばれているのは、まわりの人たち

のおかげです。先生は「次はできるよ」と何度も励ましてくれます。友達は「一緒にやろう」と声をかけてくれます。家族は家で「きっと成長できるよ」と背中を押してくれます。先生や友達や家族が、ぼくを信じて支えてくれていることに気づきました。だから、ぼくもその思いにこたえたいと思います。

柄杓田の田んぼの稲は、春に植えられた小さな苗が、夏の雑草や害虫、大雨などの困難を乗り越えて、秋には黄金色に実ります。苗が大きくなるためには、地域の人や子どもたちが世話をし続けることが欠かせません。ぼくの心の中にも、人を思いやる「苗」があるはず。ときどき雑草のように怒りや軽はずみな言葉が生えてしまいますが、先生、友達、家族に支えられて少しずつその苗を育てていけば、やがて「やさしさ」や「人を大切にしたい」という実りをむすぶことができると思います。

秋の稲刈りのとき、地域の人が「協力してきたからこそ、このお米は特別なんだ」と話してくれました。ぼくは、その言葉を聞いて「社会も同じだ」と思いました。人はだれでも失敗することがあります。でも、周りの人に理解され、支えられれば、やり直して新しい実りを生み出せると思います。

「社会を明るくする運動」は、悪いことをしないようにするだけでなく、失敗してしまった人がもう一度やり直せるように応援することでもあります。ぼくも学校で失敗することがありますが、先生や友達や家族に支えられながら、少しずつ立ち直ろうとしています。その経験から、「やり直せる社会」の大切さがよく分かりました。

これからも、地域の人とのつながりを大切にしながら、心の苗を育て続けたいです。そして、いつか自分もまた、困っている人や失敗した人を支えられる存在になりたいです。



【優秀賞】

小学生の部
福岡県更生保護女性連盟会長賞



小さなことから

北九州市立あやめが丘小学校 6年

吉 開 挑 真

ほくが考える明るい社会に向けてできる事は、何かを犯してしまう前に、周りが気づき、手をさしのべるといふ事と、助けを求めてることを表現できる世の中をつくるという事です。ほくがこう考える理由に、自分が家族との間で経験した出来事があります。

それは、お姉ちゃんとけんかしたときの事です。ほくが自分のおこづかいで買っておいだアイスを手勝手に食べられた事があります。暑い中歩いて自分の好きなアイスを買に行き、宿題が終わったら食べようと楽しみにしていました。でも、ほくがわくわくする気持ちで冷凍庫を開けた時、そこに楽しみにしていたものではありませんでした。その時、急に悲しい気持ちと絶望が入り混じったような何とも言えない感情になって、「誰が食べたの」と大きな声で言ってしまっていました。近くにいたお姉ちゃんが笑いながら「美味しそうだから食べちゃった」と言っているのを見たとき、頭にカッと血が上ったのを覚えています。自分が楽しみにしていたものを勝手に取ったくせに謝らないのを見て、大声でどなっていると、相手も負けまいと言い返してきて大げんかになりました。

そこに急に帰ってきたお父さんが入ってきて「お姉ちゃんにそんな口をきいて」と怒られました。ほくは半泣きになりながら、今まであったことを説明しようとしてました。しかし、話を聞いてくれず、「弟のお前の言い方がわるい」と一方的に叱られて、悔しい気持ちのまま泣きながら自分の部屋にこもって泣いていました。

気持ちをぶつける場所がなく、かべや布団をたたいたり、物をけったりしていると、お母さんがひょっこりと部屋に「どうしたの」と来てくれました。ぼくが泣いているのを見て、何も聞かずに横にいてくれて何だかほっとしました。少しずつ気持ちがあちついて、自分から何があったか説明すると「それはむかつくよね」と言ってくれて味方ができたような気分でした。そのあと二人で買いに行って食べたアイスはいつもより美味しかったです。

このときにぼくが思ったのは、自分の話をきいてくれないのは悲しいこと、ちゃんと自分には味方がいること、話をきいてほしいと思っているのを気づいてもらってうれしかったことです。

こんなぼくの経験から、明るい社会についてできることを考えたのは大げさかもしれませんが、小さなことの積み重ねが大きなものになっていくんじゃないかなと思います。最近テレビを見ていて、「この人は困ったときに誰にも相談できなかったのかな」と感じることがあります。きっとぼくがそう思えるのは、たくさんの友達やいろんな大人、家族に囲まれて生活できているからです。そのおかげで困ったときには助けをもらうことができるしぼくも友達を助けてあげようと思います。みんながそんな気持ちで生活できれば、きっとこれからの社会は明るくなると思います。



【優秀賞】

小学生の部
福岡保護観察所長賞



違いを知るとは学びの機会

福岡市立草ヶ江小学校 6年

仁 木 颯 哉

皆さんは「猫を描いて下さい」と言われたらどのような猫を思い浮かべるでしょうか。白猫や茶トラ、三毛猫など人によってイメージする姿はきっと違うと思います。実際猫たちは、毛色や模様が違って仲間割れせず、一緒に遊び、時には助け合い暮らしています。犬たちも同じです。見た目や大きさが違って、互いに寄り添いながら仲良くしています。

ところが、私たち人間はどうでしょうか。人間も顔や体つき、さらには肌の色や言語、育った国や地域も違います。本来なら、その違いはお互いを知るきっかけになるはずですが、しかし、残念ながら、その違いを理由に、相手を区別したり仲間外れにしたりする人がいます。その結果、いじめや争い、更には犯罪や非行に繋がってしまうことさえあります。動物たちは違いを越えて共に生きているのに、言葉を持った人間である私たちが、差別や対立を生んでしまうのは悲しいことです。

人間には、一人ひとり違った考え方や価値観があります。私は学校で友達と話しているときに「同じ授業でもこんなふうに感じるんだ」と気づくことがあります。ある友達は音楽の授業を楽しんでいるけれど、私は少し苦手だったり、逆に私は算数の授業が得意だけど、友達は難しいと感じていたりします。そのほかにも、些細なことでケンカになり最初は意見が合わないと戸惑いますが、その理由を聞いてみると「なるほど」と思えることも多くあります。違う意見を知ること、自分には無かった考え方に気付くことができ、視野が広がるのです。だから私は、自分と違う意見を持っている人に出会ったときには避けたり壁をつくったりせず、「新しい学びの機会」と捉えるように心がけ

ています。

動物たちの世界から学べることも多いと思います。自然界では、種を越えて助け合う姿を見ることがあります。鳥がシカの背中に乗って虫を食べたり、小さな魚が大きな魚の体を綺麗にしたりします。互いに利益を分け合いながら支え合って生きているのです。私たち人間も同じように、違いを力に変え、協力して生きていくことが出来るはず

です。
では、社会を明るくするために、私たちに出来ることは何でしょうか。私はまず「相手をよく知る事」が大切だと思います。例えば、友達が困っているときに「どうしたの?」と声を掛けること。掃除の時間に一緒に手伝うこと。先生や親の話をも最後までしっかり聞くこと。これらはどれも小さなことですが、相手を理解しようとする姿勢につながります。そして、私たち人間には言葉があります。言葉を使えば、自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを聞いたりすることが出来ます。動物たちよりもずっと深く分かり合える力を持っているのです。

「社会を明るくする運動」とは、特別な誰かが行うものではありません。私たち一人ひとりが、日常のなかで相手を思いやり、違いを受け入れることから始まります。もし全員が少しずつその気持ちを持てば、いじめや差別は減り、犯罪や非行のない安心できる社会に近づいていきます。猫や犬が毛色や模様に関係なく仲良くしているように、私たち人間も互いの違いを認め合い、支え合う社会をつくる事が出来ます。私はその第一歩を自分の生活から実践し、社会を少しでも明るくできるように努力していきたいです。



【優秀賞】

小学生の部
福岡保護観察所長賞



小さな思いやりで明るい社会へ

宗像市立自由ヶ丘南小学校 6年

三 浦 孝 祐

ぼくは、夏休みに福岡市にある裁判所に行きました。裁判所は、地下二階、地上十二階の十四階建てで、簡易裁判所、家庭裁判所、地方裁判所、法廷、高等裁判所があります。法廷前のけい示板には、その日にある裁判が書かれた紙が貼ってありました。たくさんの裁判が書かれてあり、そんなにたくさん事件が起きているんだなとおどろきました。

ぼくが見た裁判は、しん議ではなく、判決を言いわたすものでした。ぼくは裁判を三つ見て、一つ目が麻薬を使っていた人の裁判、二つ目が、人をなぐったりけったりした2人の裁判、三つ目が、詐欺をした人の裁判でした。三つの裁判で心に残ったことは、しっこうゆうよです。ぼくは今までしっこうゆうよのことを、死刑囚などが刑を受けるまでの時間だと思っていましたが、被告人が有罪判決を受けた時に初犯だったり、罪が軽かったりした時にしっこうゆうよを受けた間一度も罪を犯さなければ刑務所に行く必要がなくなるということだと知りました。罪を犯した人にも、もう一度やり直すチャンスをあげているようでとても心に残りました。さらに、ぼくは裁判所はきびしかったりこわかったりするイメージがありましたがそれとはちがい、裁判官もやさしい口調で話していたり、被告人も反省していたり家族が見守っていたりしていました。

また、ある日学校の授業で、保護司の人から話を聞きました。保護司は犯罪や非行をした人がもう一度同じことをくり返さないように支援したり、社会にもどるためのサポートをしたりするお仕事をしています。具体的には、仕事や住むところを探したり、月に二、三回面談をしたりしているそうです。とても大変そうなのに無給のボランティ

アと聞いておどろきました。保護司の人は、「犯罪をしてしまう人は、自分の気持ちをコントロールできなかった」と言っていました。そのときぼくは、「どうして気持ちがコントロールできなかったのかな」と考えました。

裁判のぼうちようをしたり保護司さんの話を聞いたりして、ぼくは犯罪をした人は、心に余裕がなかったのかもしれないと考えました。もちろん犯罪はどんな理由であってもしてはいけません。でも、もしその人たちに悩みや気持ちを話せる相手がいたら、ちがっていたかもしれないと思います。だから、ぼくは身の回りの人のことを気にかけたり、困っていそうな人に声をかけたりすることが、とても大切なのではないかと感じました。

これからぼくは、学校でつらそうにしている友達に声をかけてみたり、近所の人の様子に気を配ったりしたいです。「どうしたの」「大丈夫」と声をかけるだけでも、心が少し軽くなる人がいるかもしれないからです。

社会を明るくするためには、一人一人の小さな思いやりが大切だとぼくは思います。声をかけてあげたり、見守ったりする。そんなやさしさが犯罪を減らして、明るい社会に変えていく力になると思います。



【優秀賞】

中学生の部

日本更生保護協会理事長賞・西日本新聞社賞



保護司とつくる、希望のある時間

豊前市立八屋中学校 3年

中井智喜

今年の夏。それは、私にとって受験の夏です。それに加えて、私が初めて「保護司」という言葉と真剣に向き合った時間でもあります。それまでに、何度かこの言葉を耳にしたことはありました。しかし、他人事として捉えてしまい、深くは考えていなかったため詳しく学ぶ機会が今までありませんでした。そんなとき、先生に作文のテーマとして勧められました。難しそうと感じ、迷いましたが、挑戦してみようと思いこの作文を書きました。

保護司についてほとんど知識のなかった私は、調べてみることから始めました。そこで最初に出会ったのが「Time with Hope—進む、希望とともに。」と書かれたポスターでした。淡い水色の背景に桃色で書かれたその言葉は、シンプルながらも温かさを感じました。このポスターに出会ったことで、保護司についてもっと知りたいと思うようになりました。

保護司は、犯罪や非行に走ってしまった人が再び社会の一員として立ち直ることを支援する方々です。また、防犯の意識を高め、地域を見守るボランティアとしても活動しています。地域に密着しているため、地域の人として自然に関われることで、対象者にとっても信頼することができる環境になるのです。

保護司について調べていく中で、中澤照子さんという方の記事に出会いました。中澤さんは保護司だった当時、保護観察者とともに「更生カレー」と呼ばれていたカレーをつくり、食事と交流を通して関係を深め、ともに更生について考えたそうです。

私は、この記事を読んで「制度的な支援だけでは終わらない」という言葉が特に印象に残りました。ただの制度やルールでは、人は変わらないということに気づかされたのです。人と人との信頼があってこそ、心が動くものだと思います。保護司は警察官や教師、親でもない

地域の一市民として関わるので、どこか他人事のような関わりだと想像していました。しかし、実際は第三者の立場だからこそ、上下関係のない話しやすい関係で接しているのだと分かりました。

これは、保護司に限らず、私たちの普段の暮らしにも大切な考え方であると気づきました。上下関係を持たず、信頼関係を大切にしながら持つことで、一人では気づくことのできなかつたものに出会えると思います。

また、もう一つ中澤さんの記事で心に残った言葉があります。それは、「声かけは種まき」という言葉です。中澤さんは、保護司になる前から近所の子どもたちに声をかけていたそうです。記事には、「その種は雨に流れちゃうかもしれないし、どぶに落ちちゃうかもしれないけれど、声をかけていると、いらだっている相手がヒョイと気持ちの方向を変えてくれる雰囲気を感じることがある。」という文がありました。このような寛容な姿勢で、保護司が私たちの知らないところで、ある人の人生をより良いものに変えているのだと分かりました。

私は、保護司の方々日々努力をしながら、地域の防犯や保護観察者の更生に取り組んでいると学びました。そして、保護司のように社会を明るくするためにできることをしたいと考えました。その中で見つけたものが当たり前のことですが、挨拶をすることです。

挨拶はいつ、どこでも、誰にでもすることができずす。挨拶をすればどちらも心が温まります。現在、学校や地域などを見ても挨拶が薄れてきているように感じます。挨拶を恥ずかしいものと捉えず、日常の一部になることができれば、明るい未来をつくることのできるのではないかと考えました。挨拶を通して学校や地域のつながりを深めていきたいと思っています。そこで、私は学校内の人はもちろん、地域の方々にも進んで挨拶をしていこうと思います。また、ただ挨拶をするのではなく、心を込めた挨拶をしようと思います。

今までの私のように、まだ「保護司」について詳しく知らないという人がたくさんいると思います。まずは、周りにいる人からより詳しく保護司やその魅力について学び、その学んだことをさまざまな人に伝えていこうと思います。そうすることで、今よりもっとこの運動が明るく広がっていくはずす。

保護司のような優しくお互いを包みこんでくれるような人が増えたら、明るい社会は遠くないと思います。私もそんな人になれるように、少しずつ行動を積み重ねていきます。この作文を通して、明るい社会は一人ひとりの小さな行動から始まり、広がっていくのだと学びました。すべての人が過ごしやすい「希望のある時間」を持つことができるよう、この淡い水色の空にこの言葉を届けます。
「Time with Hope—進む、希望とともに。」

【優秀賞】

中学生の部
西日本新聞社賞



社会を明るくする行動

筑前町立三輪中学校 3年

松尾 優吾

私は、以前家族で佐賀県鳥栖市にある麓刑務所に見学に行ったことがあります。そこは、全面コンクリートの建物で、窓には太くて頑丈な柵があり、とても冷たい印象を持ちました。

見学では、少人数ずつグループになり、刑務官と一緒に一階の大きな部屋に入りました。そこでは、刑務所の一日の日課の説明や、仮釈放前に一般家庭のような部屋があることなどを教えていただきました。その一般家庭のような部屋は、刑務所の他の所とは雰囲気異なり、キッチンやこたつの部屋などもありました。

刑務所では、一日中懲罰を受けるという訳ではなく、介護の資格取得を目標に勉強したり、実技などを練習したりする人もいて、とても驚きました。社会復帰に向け、様々なことが行われていることを初めて知りました。

その後、刑務官の指導の下、ろくろを使いお茶碗を作る体験をしました。私は、刑務所の中で、陶芸をしている方がいることを初めて知り、不思議に思いました。「なぜ刑務所内で陶芸をしているのか」と刑務官に尋ねてみると、「人間は土などの自然なものに触れると心が落ち着き、どうして悪いことに手を出してしまったのだろうと、反省する気持ちが芽生えることが多々あるのだ」とのことでした。

次に、刑務所の体育館のような広い場所へ移動すると、そこにはダンスやテーブル、手芸品など、たいへん多くの品物が売ってありました。まるで、デパートのようでした。そこには、全国の刑務所の刑務作業の中で作られたもので溢れていました。母はそこで日用品などを購入していました。私は、悪いことをした人が作ったものを買うのは、何となく気が進まず、一通り見回ってから母が会計するのを待っています。

した。すると、母が私が浮かない表情をしていたことに気づき、声をかけてきました。「ここでお母さんが何か買うことで、わずかかもしれないけれど、作った方にお金が渡って、出所するときのお金が増えるの。一般社会に出たときにわずかでも元金が増えれば、立ち直りの手助けになるのよ。」——私は、母の言葉を聞いて、はっと気付かされるものがありました。

私は、一度過ちを犯した人を軽蔑し差別していたことに気が付いたのです。立ち直ろうとしている人の思いを妨げているのは、私のような考え方だと反省しました。この見学に行かなければ、今も知らない世界をたくさん知ることができました。

私はこれから、まずは知ること、そして受け入れることを忘れてはならないと思いました。これが今私にできる社会を明るくすることへの第一歩になるのだと、強く感じました。



【優秀賞】

中学生の部
福岡県保護司会連合会会長賞



社会を明るくするためにできること

福岡市立片江中学校 1年

田 子 由 名

三年前の春、私は期待と不安を抱きながら新しい学校の門をくぐりました。家庭の事情により大好きだった地元を離れ、見知らぬ土地での新生活が始まりました。新しい環境への適応、そして何よりも新しい友達ができるかどうか、ずっと私の心に不安として残り続けていました。

転校初日、これで2回目の転校でしたがやっぱり少しこわかったです。初めて県外に転校して、誰に話しかければいいのか分かりませんでした。休み時間も一人で過ごすことが多く、周りの賑やかな声とは裏腹に、私は静かに絵を描いていました。このときの孤独感は、私が感じたことのないものでした。

そんな私に、最初に優しく声をかけてくれたのは、隣の席の子でした。私が描いていた絵を見て「何描いてるの？めっちゃ上手だね！」と話しかけてくれました。その小さな一言が私がクラスの子に打ち解けるようになったきっかけでした。少しずつ他のクラスメイトとも話すようになり、共通の話題や趣味を見つけることができました。みんなの笑顔と優しさに触れるたびに、私の不安は少しずつ消えていき、新しい学校がかけがえのない大切な場所へと変わっていきました。この転校の経験は、私に多くの大切なことを教えてくれました。

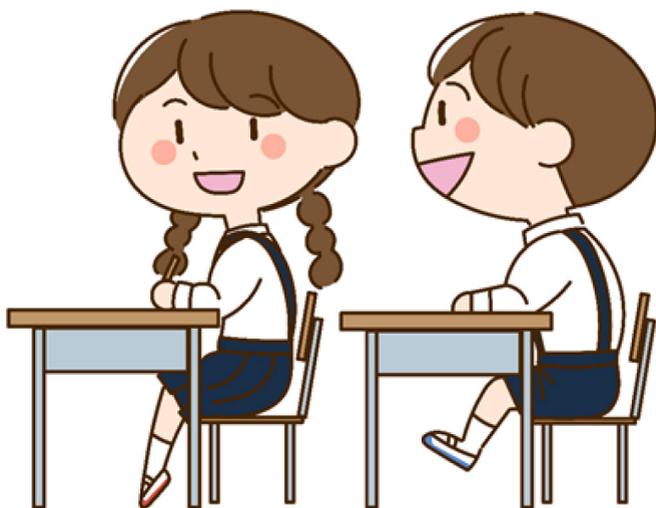
まず、「他者の痛みに寄り添う心」です。私が転校して孤独を感じたからこそ、新しい環境にいる人や困っている人を見かけた時に自然と「何かできることはないか」と考えるようになりました。あの時の私が、誰かの一言に救われたように、私もまた誰かの支えになりたいと思うようになりました。

次に、「多様性を受け入れる寛容な心」です。みんなが私という「転

校生」を温かく迎え入れてくれたように、異なる背景や考え方を持つ人々を受け入れることの重要性を実感しました。違いを認め、尊重し合うことで、より豊かで深いつながりが生まれるのだと学びました。

「社会を明るくする運動」とは、まさにこのような一人ひとりの心の変化から始まるのだと私は考えました。特別なことではなく、日々の生活の中で、誰かに寄り添い、優しく声をかけ、違いを認め合う。そうしたら小さな積み重ねがやがて社会全体を明るく照らす光になると思います。

私は、転校という経験を通じて得たこの「つながりの温かさ」を忘れずに、これからも出会う全ての人々に対して、心を開き、優しさを分かち合っていきたいです。そして、誰もが安心して自分らしく輝ける、そんな「明るい社会の実現」に、私も貢献していきたいと思います。



【優秀賞】

中学生の部
福岡県保護司会連合会会長賞



素直な気持ち

福岡市立城南中学校 1年

前田乃咲

私には特別支援学級に通う小学二年生の妹がいます。妹はとても素直で、私よりも何倍も「ありがとう」や「ごめんね」を言えます。例えば、私が鉛筆を拾ってあげただけでも、「ありがとう」と笑顔で言ってくれますし、ちょっとぶつかっただけでもすぐに「ごめんね」と謝ります。そんな妹を見ていると、私も見習いたいと思います。

この前工事現場を通ったときに、ヘルメットをかぶった少し見た目が怖そうな作業員の人に、妹はためらいもなく「おはようございます」とあいさつをしました。私は自分から声をかける勇気が出ない相手だったので、驚きました。でも、その人はにっこり笑って「おーおはよう、行ってらっしゃい」と笑顔で返してくれて、私はさらに驚きました。人は見た目だけでは分からないこと、そして素直なあいさつが人の心を明るくできるんだと知ってとても心に残りました。

社会の中には、障がいを持つ人や立場の違う人に対する偏見があります。でも、おたがいに正しく理解して支え合うことが大切です。妹のように素直な気持ちで人と接することができれば偏見や差別は少しずつなくなっていくと思います。

私は、もしみんなが妹のように素直な気持ちを大切にできたら、社会はもっと温かくなるのではないかと思います。たとえば、学校でのいじめも、相手に「ごめんね」と言えたり、「ありがとう」と伝えられたりすれば、大きな問題になる前に解決できるはずです。小さな優しさや感謝の言葉が広がっていけば安心して過ごせる社会に近づけるのではないかと思います。

社会を明るくする運動は、特別な人だけが取り組むことなく、私達一人一人の思いやりから始まる運動だと思います。私も妹を見習っ

て、身近な人に素直に「ありがとう」「ごめんね」「おはよう」などを大切に言えるようになりたいです。そして、その気持ちを広げて偏見のない社会をつくり、少しずつ明るい社会にしていきたいです。



【優秀賞】

中学生の部
福岡県更生保護協会理事長賞



たった一台の自転車から見たこと

古賀市立古賀北中学校 3年

下 岸 希

私の大切な自転車が盗まれた。家の駐輪場に鍵をかけて停めていたはずなのに、友達と遊びに行こうとしたときにはもう、私の自転車はなかった。

最初はただ「どこかに移動されたのかな」と思った。しかし何度見渡しても、私の青い自転車は見つからなかった。警察に盗難届を出し、親にも報告したが、心の中では「もう戻ってこないだろうな」と諦めかけていた。

その自転車は、小学校の卒業祝いに祖父母が買ってくれたものだった。買い物や塾への行き帰り、友達との遊びにも毎日一緒だった。

失って初めて気がつくことがあると、人はよく言うが、それは本当だった。

その日の夜、布団に入ってもなかなか眠れなかった。「誰が盗んだのだろう」「どうして盗んだのか」そんなことばかり考えていた。怒り、悲しみ、不安、悔しさ。いろいろな感情が頭の中をぐるぐるとまわっていた。

翌日、担任の先生にその話をした。先生は私の話を静かに聞いて、こんなふうにした。

「それは本当に悔しかったね。でもね、人のものを盗む人にも、理由があることが多いんだよ」

理由がある？盗みは悪いことに決まっている。なのに、理由なんてあるはずがない。そう思った。

だが、先生の言葉がずっと心に残った私は、「自転車、盗難、理由」などとインターネットで調べてみた。すると、意外なことがわかった。中には「生活に困っていた」「どうしても帰らないといけなかった」「自分の自転車を壊されて、他に手段がなかった」という理由があったのだ。

もちろん、それで盗んで良いことにはならない。

でも、「悪いことをする人＝悪い」と単純に決めつけていた自分の考え方が、少し揺れた。

人はそれぞれ見えない背景を抱えている。表に出ている行動だけで、その人を判断するのは危険だということを、この経験を通して知った。

同時に、私は「自分が逆の立場だったら」とも考えるようになった。もしも、財布を落として帰れなくなったら？家に帰るために誰かの自転車を借りたくなくなってしまってもいいかもしれない。もちろん、それでも「借りる」ではなく「盗む」になってしまう以上、許されないことだ。でも、実際に追い詰められたとき、人は冷静でいられるだろうか。

社会には、正しさと同時に、やさしさも必要だと思う。

自転車を盗まれたことは、悲しく、悔しい経験だった。でもその中で私は、「人を一面だけで判断してはいけないこと」「正しさの中にある複雑さ」そして「当たり前と思っていた日常のありがたさ」に気づくことができた。

その後、新しい自転車を買ってもらった。今度は二重ロックをして、しっかりと防犯対策をしている。でも、それ以上に心に残っているのは「盗まれた自転車が教えてくれたこと」だ。

人間は誰でも、間違いを犯す可能性がある。大切なのは、過ちをただ責めるのではなく、その背景を知ろうとし、理解しようとする姿勢だと私は思う。もちろん、許せないこともある。けれど、そこに「なぜ？」と問うことができたなら、社会はもっと優しくなれる気がする。

もし、あの自転車が戻ってきたら、私はきっと、その人にこう言いたい。

「私の自転車を使って、どこへ行こうとしたの？何があったの？」
そして、その答えを、静かに聞ける自分でありたいと思う。



【優秀賞】

中学生の部
福岡県更生保護女性連盟会長賞



誰だって、みんなで変わる

福岡大学附属大濠中学校 1年

曾 唯 恩

僕の両親は、「元」犯罪者と友達です。お名前は伏せますが、「窃盗」という名の犯罪を犯したことのある方です。あなたは、僕の両親を非難しますか。その方は、家に閉じこもってすごすべきですか。

僕は、犯罪をおかしたことのある方々の立ち直りは、周囲の人間のサポートがあれば可能なことだと思っています。むしろ、そういう人がいることで立ち直りやすくなるのではないのでしょうか。人間は、犬や猫と違って、考えられる動物です。噛んではいけない、と叱っても噛む犬や猫と違い、「何故噛んではいけないのか」を考えます。そして、正しく「教える」ことができれば、「痛くするから、噛んではいけない」と理解できます。だから、「立ち直り」は可能だと思います。

では、実際の立ち直りはどうでしょうか。両親の友達によると「もう一度刑務所に戻る人が多かった」だそうです。

矛盾していると思いませんか。でも、考えてみてください。その人達に「教える」人はいましたか。「助けて」あげる人はいましたか。

今の現状はどうでしょうか。犯罪を行った場合、メディアのカメラに囲まれ、袋叩きにされ、視聴者に文句を言われる人。新聞にでかでかと写真を貼られ、心無い言葉を書かれる人。連日押しかけられ、人間に向けるはずのないひどい言葉を浴びせられる家族達。誰得^{だれとく}なんのでしょうか。もちろん、メディアや新聞はこれが仕事です。しかし、これは「明るい社会」ですか。犯罪や非行という事実は変わりません。社会にとって悪いことをしたのは確かです。でも、ここまでする必要はありますか。たとえ法を犯した人でも、嘲笑う必要はあるのでしょうか。馬鹿にする言葉。気持ち悪がる言葉が飛びかう社会は、明るいですか。

少なくとも、僕はそう思いません。

もっと言えば、刑務所から出てきた人達をさらすのもメディアです。「見てください。あの人が悪者です」とさらし、馬鹿にし、非難します。今からもう一度、新しい人生を始めようとした所で、こんな風に言われると、やる気をなくす人もいます。

僕は、犯罪や非行を行ったことのある人が立ち直るために必要なのは、周囲のサポートや助けだと思えます。人は、人で変われると思えます。実際に、日本や世界にはたくさんの自助グループが存在し、そこで再犯をしないように努力している人がいます。矯正施設にいく人もいます。そこで、周りからの助けを得ることで、少しずつ社会に復帰していきます。助けを得ることで、何がいけなかったのかを考えることができます。今こそ、僕達が手を差し伸べるべきではないでしょうか。

僕の両親の友達は今現在、トラックの整備士として普通に働いてます。その人がこの職につくまで、何度も周りの助けを借りて、今は普通の暮らしをしています。このように、誰だって、立ち直ることはできます。一人で無理なら、みんなでがんばればいい。僕は将来、こうやって手を差し伸べられる人になります。



【優秀賞】

中学生の部
福岡県更生保護女性連盟会長賞



「社会を明るくする運動」

福智町立金田義務教育学校 8年

高倉 幸夏

やさしさとはどういうことなんだろう? 「困っている人を助けること」とか「思いやる気持ちをもつこと」などよく言われているけど、私は本当のやさしさとは行動するという事だと思います。そのことに気づいたのは、ある日家族とショッピングセンターに行った日のことでした。

買い物をしていると小さい子の「ママー」という泣き声が聞こえてきました。その子を見るとまわりに保護者の人も見当たらず、私は少し気になったけど声をかける事に勇気が出せず、その場で立ち止まって内心誰かが助けてあげるのを待っていた自分もいました。

でもそのとき、となりにいたお姉ちゃんが、ずっと迷うこともなくその子に近づいて「大丈夫? お母さんとはぐれたの?」と声をかけたのです。そのお姉ちゃんの姿に私も背中をおされて私も「大丈夫?」と声をかけてその子のそばに行くことができました。お姉ちゃんはそっとその子をだき上げて、私も近くに行ってみて「お名前、いえる?」と聞いてみました。でもその子はなかなか安心できないようで、ずっと不安げな顔をしていました。私達は、その子を店員さんのところへ連れて行こうとしましたが、その子はお姉ちゃんの手をぎゅっとにぎってなかなか手をはなしてくれませんでした。ちょっと笑ってしまったけど、それだけこわかったんだと思いました。きっと知らない人がたくさんいる中でひとりになって泣いても「ママー」と呼んでも家族は来ないという状況がどれだけこわくて心細かったのだろうと思うと胸がぎゅっとなりました。

そのあとも買い物している時、お姉ちゃんと2人で「あの子大丈夫かな」と不安になっていると、その子の家族とたまたますれ違って、その子は少し照れたような顔で私達に手をふってくれました。その子の笑顔がみられて、私の心もとてもあたたかくなり行動して良かったと思いました。

この出来事を通して、私は「やさしさ」は気持ちだけじゃなくて、行動にうつすことが大切なんだと気づきました。迷子の子を見つけたとき、私はどうすればいいかわからず立ち止まってしまいました。でも、お姉ちゃんが自然に声をかけた姿をみて、私の中でも「助けたい」という気持ちが大きくなり、行動にうつすことができました。誰かが優しくする姿を見ることで、自分の中の優しさに気づくことがあるのだと知りました。そのあと、ずっと不安そうだった子が小さく手をふってくれたとき私はとてもあたたかい気持ちになりました。「ありがとう」と言われたわけではないけれど、そのしぐさからちゃんと気持ちが伝わってきました。

今回のことで、たとえ小さな行動でも人の力になれることがあるんだと感じました。ほんの一言の声かけやそばにいてあげるだけでも、少し行動するとだれかの不安を減らすことができるかもしれません。きっとまわりの人たちも安心してすごせる社会になると思います。私はこれからも、困っている人を見かけたときは、少し勇気を出して声をかけられるような人になりたいです。そして、今度は誰かの背中をおせるような、優しさを広げられる人でありたいと思います。



【優秀賞】

中学生の部
福岡保護観察所長賞



僕のセーフティーエリア

朝倉市立南陵中学校 3年

今村 伊吹

僕の“社会”は、学校、塾、家の三つが主です。その中でも、家という社会について紹介します。

僕は、じいちゃん、ばあちゃん、お父さん、お母さん、妹、弟の七人家族です。じいちゃんが農業を営んでいるので、五月には米の種まきを、その後は毎日苗の水やり、そして六月には田植えを、家族全員でやります。合間で田んぼを耕すのですが、最近はトラクターの乗り方をじいちゃんに教わって、一人で運転できるように練習しています。ばあちゃんは別に仕事をしながら、田んぼのことや僕たち孫の色々な送迎をしてくれたりしています。お父さんやお母さんも毎日、仕事をしながら、僕たちのことをしてくれます。

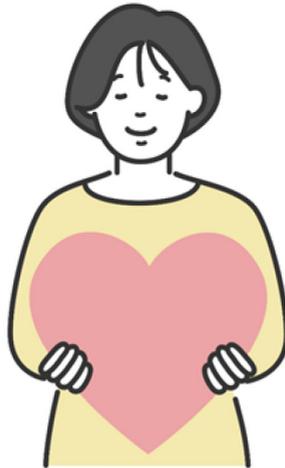
その中でも我が家には特別な時間が存在します。それは、夕食後、寝る前に開かれるチアーズタイム、通称お茶会です。大人はお酒やコーヒー、子どもはジュースで乾杯をし、お菓子を食べながら、ただ、話すだけの時間です。今日の給食は何だったか。学校で何をしたか。好きな人のこと。友達のこと。プロ野球のこと。習い事のこと。お母さんが何歳に見えるか、どの写真フィルターが一番盛れるかという、本当にどうでも良い内容がほとんどです。

しかし最近は、進路や将来就きたい仕事についても話すようになりました。人生の先輩方の話は、おもしろいこともあり、びっくりすることもあります。忠告もあります。よく言われることは、「万引きするなよ。十円の物を盗ったとしても、百万円の物を盗ったとしても、どちらも一緒の犯罪やからな。」ということです。他にも、人の時間も自分の時間もムダにしないこと、人に迷惑をかけないこと、今しかできないことに一生懸命になること、青春すること、自分の人生に責任を持つこと、はたまた女性の気持ちを教えてくれることもあります。

話をする上で、一つ大きなルールがあります。それは、家の中で、家族にだけはなにを言ってもいいということです。不満に思うことや、

グチ、弱音、外では言ってはいけないことを家族の前では言って良いのです。「家はセーフティーエリアだから、何を言っても良いよ。」とお母さんは言います。もちろん言えていないこともあるけど、こうやって安全地帯を作ってくれて、話を聞いてくれる環境があることがとても心強く感じます。

七人家族という小さな社会だけど、その中でもそれぞれに役割があって助け合って生きています。これが、家族外になったり、人数が増えたりすると、大きな社会になります。人の数だけ考え方も多くなります。僕はまだ、十四年しか生きていないけど、今後どんどん大きくなる社会で、しっかり生きていくために、自分のことも、周りのことも大切にしていきたいです。そして、家族が僕たちにつくってくれたこの“セーフティーエリア”を、僕も誰かの為につくられたらいいなと思います。



【優秀賞】

中学生の部
福岡保護観察所長賞



自分たちで決めて守る

久留米市立城島中学校 2年

吉村春真

社会を明るくするためには、「一人一人がルールを意識することが大切」だと常套句のように言われる。しかし、現実はその簡単にはいかず、散々言われているのにルールへの向き合い方が改善されない。どうすればルールへの向き合い方が改善され、社会を明るくすることができるだろうか。

ある日、数人が学校に不要な物を持って来て、学年集会が開かれ、先生方から指導を受けた。しかし、数日後また不要な物を持ってきて、また学年集会が開かれ、同じ指導を受けた。同じ人が繰り返したかは分からないが、一度言われたことが理解できて、自分事としてルールを意識していれば、決して起こるはずのないことだ。全体責任であることは分かっている、不要な物を持ってきた人は一体何を考えているのだろうか、と怒りを感じた。非常に苦痛な時間だった。結局ルールを一人一人が意識することはなかなか難しい。だから同じことが繰り返されるのである。

そこで、ルールを守らない原因を過去の経験から探してみる。私がルールを破ってしまったときは、周りに誰もいないときや、周りの人の視線が届きにくいときであった。例えば、小学校のときに廊下を走ってはいけないと頭では分かっている、周りに人がいないとき、つい走ってしまった。また、通学しているときに、赤信号を無視して渡っている人を見かけたことがある。赤信号は「止まれ」だと分かっている、恐らくその人も「誰も見ていないし、自分一人くらい良いだろう。」という意識が生まれたのかもしれない。

このように、ルールを守らない原因は、個人の価値観や置かれている状況によって異なってくる。きっと不要な物を持ってきた人も、赤

信号で渡った人も、廊下を走ったあのときの私も、いけないとは分かりつつ、「周囲に誰もいない、これくらい気づかれないだろう。」と判断した瞬間に「つつい」の心が動き始めたのだと思う。これが個人によって異なるわけだから、いけないことだと叱責されても全員が意識することは困難なのだろうと推察できる。つまり、守れない原因から万人への解決策を考えるには無理があるだろう。

そこで、ルールを守らない原因を探すのではなく、ルールを守れている理由を探してみることにした。例えば、学級目標である。私たちの学級目標は、「協力して思いやり笑顔あふれる二の二」である。何か困ったときやトラブルがあったときは、ここに立ち戻る。そうすれば、何をすれば良いのか、このときのルールは何なのか、などを考えることができ、ルールを守りつつ主体的に行動できる。そうやって守れるのはなぜだろう。それは、自分たちで話し合っただけで決めたルールだからだと考える。

このことから、ルールを守るためには自分たちで作ったルールだという意識をもつことだと考える。不要な物を学校に持ってきた例では、不要な物を持って来てはいけないルールがなぜあるのか、撤廃してもいいのではないのかを議論し、自分たちなりにルールを決める過程を踏むことで、真の意味でこのルールの必要性を理解するのではないだろうか。そうすれば、自分たちで設定したルールであるので、守ることが前提となる。すると、「先生に言われたから」や「叱られるから」といった言い訳は通用しなくなるはずだ。

社会という視点で考えてみれば、ルールは法律になる。法律は、国民の投票で選ばれた国会議員によって決められる。つまり、国民の意思が反映されている。これが民主主義だ。このことから法律は間接的であるが、私たち一人一人の意思で作られているからこそ、守るべきものだと捉えることができる。そのことを一人一人が理解することができれば、法律というルールを積極的に守ることができるようになり、社会が明るくなる小さな一歩になるのではないかと私は考える。



【佳作】（小学生の部・順不同）

祖母から学んだ社会を明るくする力	福岡市立青葉小学校	6年	尾崎	莉心
ゆずり合い 助け合いの社会へ	福岡市立名島小学校	6年	中村	由依
一声の勇氣	福岡市立名島小学校	6年	ふくもと	本湊
薬物などを使わない未来にするためには	福岡市立月隈小学校	6年	かわく	ぼ桃
助け合い	福岡市立東吉塚小学校	6年	とが	お梅
みんなの普通は違うはず	福岡市立弥生小学校	6年	なか	やま山
みんなでつくる明るい社会	福岡市立宮竹小学校	6年	なつ	はら原
天秤が傾く前に	福岡市立若久小学校	6年	かわ	の川
妹がくれた勇氣	福岡市立弥永西小学校	5年	むかえ	迎
笑顔あふれる社会へと	福岡市立別府小学校	6年	やま	くち山
あいさつで笑顔に	福岡市立別府小学校	6年	さ	とう藤
心をこめてありがとうの一言を	福岡市立別府小学校	6年	の	ばた畑
一人の笑顔から広がる光	福岡市立早良小学校	5年	やま	なな山
自分らしく生きる	福岡市立石丸小学校	6年	きよう	え姜
みんなで支える明るい地域	福岡市立愛宕小学校	6年	みづ	てん繆
最初の一歩は私達から	福岡市立玄洋小学校	6年	お	お大
生き生きとした社会のために	大野城市立大野南小学校	4年	まつ	ちと松
相手の立場を考える	那珂川市立安德南小学校	6年	たか	す高
犯罪のない町づくりのために	朝倉市立蜷城小学校	6年	が	美空
行動にうつす大切さ	朝倉市立杷木小学校	6年	ひ	なる野
大切にしていること	筑前町立三並小学校	6年	やま	ぐち山
犯罪よ非行よなぜ起こす	久山町立山田小学校	6年	かじ	わら梶
一台の青パトから	須恵町立須恵第二小学校	6年	いし	はら石
みんなでつくる明るい社会	新宮町立新宮東小学校	6年	たけ	やま竹
支え合うことで生まれる明るい未来	宗像市立吉武小学校	6年	はま	ぐち濱
話すことの大切さ	福津市立福岡小学校	6年	くさ	ば草
				場美
				優

再犯防止するには	岡垣町立戸切小学校	6年	うす薄	い井	あおい葵	
社会を明るく	芦屋町立芦屋小学校	6年	かま蒲	はら原	め明	い依
私ができること	北九州市立折尾東小学校	6年	まつ松	しま島	ゆい結	か花
犯罪のない社会へ	北九州市立引野小学校	6年	まつ松	もと本	がい佳	と士
みんなに支えられて	北九州市立鴨生田小学校	6年	み三	よし好	はな華	みち道
元気をくれるまほうのことは	北九州市立藤木小学校	2年	かじわら		こうき	
私の行動で	北九州市立くきのうみ小学校	6年	さ佐	とう藤	くるみ	
だれかの笑顔	北九州市立あやめが丘小学校	6年	しげ重	いし石	こ心	な花
「よりそう気持ち」	北九州市立あやめが丘小学校	6年	あか赤	みず水	つ結	み羽
「社会を明るくする運動について」	北九州市立西小倉小学校	6年	はし橋	もと本	ゆい悠	う海
子供たちが犯罪、非行をしない明るい社会へ	福岡教育大学附属小倉小学校	6年	こ小	ばやしばやし	おう央	すけ典
やさしさであふれる社会になるために	北九州市立中井小学校	6年	かね金	き木	ゆい結	か花
皆で作ろう明るい社会	北九州市立城野小学校	6年	つぐだ		ま姫	凛
明るい社会への一歩	北九州市立曾根小学校	6年	ます舂	だ田	ま真	お桜
地域コミュニティと私たち	北九州市立東朽網小学校	6年	ひ日	あさ浅	ゆい結	か花
非行・犯罪防止作戦	北九州市立大里東小学校	6年	の野	もと元	もも桃	たろう太郎
受け入れること	北九州市立西門司小学校	6年	いな稲	はら原	せい清	た太
私たちの安全な地域をめざして	苅田町立与原小学校	5年	うえ上	だ田	あき明	ほ穂
「明るい地域、きれいな川」	苅田町立片島小学校	5年	はし橋	もと本	き希	こ子
「みんなちがって、みんないい」	苅田町立馬場小学校	6年	さ佐	さ々	き木	あおい葵
話を聞くことが未来を変える	築上町立築城小学校	6年	よし吉	むら村	ゆ侑	め芽
偏見をなくすために	豊前市立合岩小学校	6年	おぎ荻	の野	な凧	ぎ朝
家庭からつくる明るい社会	上毛町立南吉富小学校	5年	ふじ藤	わら原	も百	え笑
わたしの妹	添田町立添田小学校	5年	え江	くち口	な	の
安心な日常	川崎町立真崎小学校	6年	てら寺	だ田	ゆず柚	き絆
明るい社会にするために	赤立立赤小学校	6年	か加	く未	り莉	あ愛
社会を明るくする SNS の使い方	直方市立中泉小学校	6年	やま山	だ田	じゅ珠	な奈
地域での協力の大切さ	直方市立植木小学校	6年	たき瀧	くち口	あずき梓	

【佳作】（中学生の部・順不同）

「もう一度、信じてもらえたら」	福岡市立福岡中学校	2年	佐方悠と人
許し、支え合う心	福岡市立箱崎中学校	3年	井村天音
つながりが生む楽しさと希望	福岡市立香椎第1中学校	2年	川上廉太
明るい街づくり	福岡市立板付中学校	1年	甲斐彩葉
あいさつは心の礼儀	福岡市立三筑中学校	2年	村山香穂
母の勇氣ある一歩	福岡市立吉塚中学校	2年	米田百花
夜道の不安から考えた未来	福岡市立平尾中学校	1年	外村楓
立ち直る人にチャンス	福岡市立警固中学校	2年	外野莉緒
「過去より今を見てほしい」	福岡市立春吉中学校	2年	香つき紗空
小さな気づき	福岡市立春吉中学校	2年	福島かずは葉
見えないところで支える人	福岡市立筑紫丘中学校	2年	宮川おほ桜香
やり直すことを応援する社会へ	福岡市立友泉中学校	1年	新田き煌空
支え合いでつくる明るい地域	福岡市立早良中学校	1年	石津ゆい結菜
社会を明るくする運動	福岡市立原北中学校	2年	しほ谷あきひ旭
社会を明るくするためにできること	福岡市立原中央中学校	1年	たまきとう尊一
割れ窓理論と小さな思いやり	福岡市立姪浜中学校	1年	よし野り紗
社会を明るくするために	福岡市立壱岐中学校	2年	なかむらゆうか花
社会を明るくする運動	福岡市立壱岐中学校	2年	やまてひより依
たった一言で人は救われる	糸島市立前原東中学校	2年	とうじもも桃果
だれもが生きやすい社会に	糸島市立志摩中学校	1年	くすくゆい結依
社会を明るくする運動と立ち直り	大野城市立大利中学校	2年	あん案のうゆう悠輔
社会を明るくするには	春日市立春日野中学校	3年	おかもとそう太朗
間違いを認めた勇氣にどう向き合うか	太宰府市立太宰府西中学校	2年	まつしゅり梨
僕らが目指す社会へ	朝倉市立柁木中学校	2年	てしませい輝
罪の重さ	篠栗町立篠栗中学校	2年	ねずゆうか花
安心がいきわたる世の中へ	粕屋町立粕屋中学校	1年	あざはらりゅう隆成

寄りそえる未来へ	福岡県立宗像中学校	1年	まつ した	松 下	み 心	さき 咲
平和な社会を目指して	福津市立福岡中学校	2年	たか やま	高 山	き 咲	え 衣
安全な街にするために	宗像市立日の里中学校	8年	や の	野	ま 真	な 菜
犯罪や非行をなくすためにできること	水巻町立水巻南中学校	2年	きた ざき	北 崎	ひで 秀	たか 隆
犯罪や非行をなくすために	中間市立中間南中学校	3年	か と	加藤	とう 珠	はや 颯
変えるために	遠賀町立遠賀中学校	3年	くろ かわ	黒川	ゆ 結	め 夢
偏見のない庭で	北九州市立熊西中学校	3年	まえ だ	前田	ゆう 悠	り 里
「ふみとどまる勇氣」	北九州市立則松中学校	1年	よし むら	吉村	ち 知	さ 紗
地域の人と触れ合うということ	北九州市立槻田中学校	2年	さ ざわ	佐澤	り 凜	お 音
「支えられて気付いたこと」	北九州市立石峯中学校	2年	やま さき	山崎	そう 颯	ま 真
「社会を明るくするためには」	北九州市立洞北中学校	1年	おお がみ	大神	こ 心	な 絆
社会を明るくするために出来ること	北九州市立若松中学校	1年	なが つか	永塚	ま 愛	な 菜
支え合いと思いやりでつくる地域社会	北九州市立大谷中学校	2年	なか がわ	中河	り 璃	あ 愛
社会を明るくする第一歩	北九州市立飛幡中学校	1年	いけ だ	池田	み 弥	あ 愛
支援からやり直せる社会	北九州市立飛幡中学校	1年	あさ だ	浅田	み 心	ゆ 優
私の考え	北九州市立南小倉中学校	3年	き むら	木村		いと 紘
再犯のない明るい社会へ	北九州市立霧丘中学校	2年	いの うえ	井上	ち 智	さ 咲
犯罪や非行のない地域社会を目指して	北九州市立菊陵中学校	2年	なか がわ	中川		しゆん 俊
現代社会における「絆」	北九州市立城南中学校	2年	きた むら	北村	ゆき 幸	ね 音
「もう一度歩き出せる社会」	北九州市立曾根中学校	1年	まつ おか	松岡	り 莉	な 奈
つながりを大切に作る社会へ	北九州市立南曾根中学校	3年	た はら	田原	め 萌	い 生
過去より未来を見つめる社会へ	北九州市立東郷中学校	3年	だい く	大工	あゆ 歩	み 美
「ありがとう」の大切さ	北九州市立門司中学校	2年	ゆ ぐち	湯口		すみれ 純
言葉の重み	北九州市立門司中学校	2年	かわ むら	川村	りっ 六	か 花
一度犯罪を犯してしまったら？	行橋市立泉中学校	2年	おく むら	奥村	は 羽	る 琉
明るい未来のために	みやこ町立伊良原中学校	3年	うち だ	内田	り 理	よ 葉
少年、少女の犯罪について	行橋市立行橋中学校	1年	みや ぎ	宮城		しゆん 詢
やり直す勇氣、支える心	築上町立椎田中学校	3年	か く	加来		し 士

思いやりの輪をひろげよう	上毛町立上毛中学校	3年	木村紗英
社会を明るくする運動	福智町立金田義務教育学校	8年	たつしまか な 辰島夏菜
社会を明るくするためにできること。	田川市立田川東中学校	2年	さくらいこころ 寧
立ち直りを支える私たちの役割	直方市立直方第二中学校	3年	いしだ さ ら 石田さ
明るい社会をつくるために	宮若市立宮若西中学校	7年	あしのか こ 岸野佳子
小さな光が社会を照らすとき	宮若市立宮若西中学校	7年	うらべ あん 樹 占部杏樹
やさしさが、誰かの明日を変える	飯塚市立飯塚第一中学校	2年	やの りゆう せい 矢野龍星
安全な地域にするためにできること	飯塚市立飯塚鎮西中学校	8年	つる ひさ くる み 鶴久くるみ
「社会を明るくする運動」	桂川町立桂川中学校	1年	みかしま いつ 稀 三ヶ島逸
希望を信じる支えが社会を明るくする	久留米市立諏訪中学校	3年	さとう りり あ 佐藤梨里愛
明るい未来へ	久留米市立筑邦西中学校	1年	おおくぼ ゆう な 大久保ゆうな
自分を変えてみて	うきは市立吉井中学校	1年	さかさかわ あい り 笹川あい凛
思いやりの星に	うきは市立吉井中学校	1年	はのの さ あや 羽野沙彩
他の人と違って	うきは市立浮羽中学校	2年	そのだ り お 園だりお
あいさつの力を信じて	大川市立大川桐英中学校	3年	やま さき り お 山崎莉音
安心して暮らせる社会を維持するために	大川市立大川桐英中学校	2年	いぐち たい が 井口大が
社会を明るくする運動	大川市立大川桐薫中学校	2年	えぐち し ほ 江口しほ
落とし物が教えてくれたこと	柳川市立柳城中学校	3年	やま し た み 山下雅未
明るい未来のために	柳川市立三橋中学校	2年	さんこだ わか 奏 三小田わか
大切に想って	私立大牟田中学校	3年	のじり ゆ い 野尻悠衣
私は変わる	大牟田市立宅峰中学校	3年	まつおか あや か 松岡彩加
心のコップ	大牟田市立白銀中学校	2年	まつのぶ き さ まつ松延き咲
友達関係	八女市立立花中学校	3年	きほら ゆ な 木原愛星
小さなふれあいがあったもの	福岡県立輝翔館中等教育学校	2年	さかい 境 うみ 境海
「誰もが希望を持てる社会へ」	福岡県立輝翔館中等教育学校	2年	たて ちと か りん 立本か鈴

法務省保護局公式 X



法務省保護局公式 Instagram



社会を明るくする運動ホームページ



社明サイト・作文コンテストページ



ホヅっちゃん (ご当地ホヅちゃん)

法務省公式 YouTube チャンネル
(社明再生リスト)



のぞいてみてね♪

第75回 “社会を明るくする運動” 作文コンテスト入賞作文集

令和8年2月発行

編集 第75回 “社会を明るくする運動” 福岡県推進委員会事務局
〒810-0044 福岡市中央区六本松4丁目2番3号

制作 更生保護法人 福岡県更生保護協会

※本作文集の作品を転載する際には、「第75回“社会を明るくする運動”
作文コンテスト入賞作文」であることを必ず明記してください。